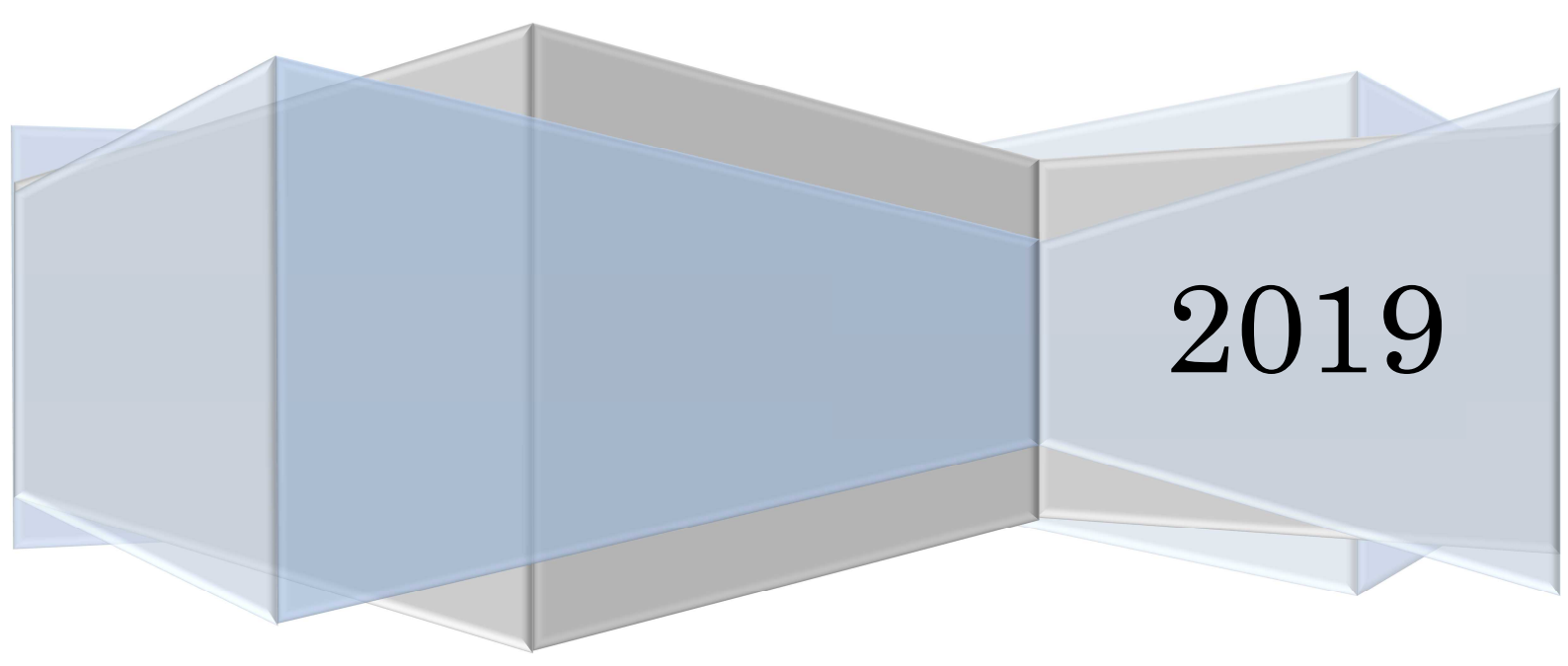


2019 年度文学部新聞学科 鈴木雄雅ゼミ

夏季合宿レポート

2019 年 9 月 24 日（火）～26 日（木） 広島



2019

2019年度新聞学科 鈴木雄雅ゼミ 夏季合宿

地方メディアの実態を探る：広島編 Ver.03

2019年9月26日

■実施期間 2019年9月24日（火）～26日（木） ■訪問地 広島

※集合時間、場所及び見学概要は最終 Ver.を参考にする

■9月24日（火）（前日または）昼までに現地入り。各自昼食を済ませたのち

集合時間 13:50 集合場所 NHK 広島放送局（NHK 広島放送センタービル1階 NHK 受付前）

NHK 広島放送局（広島市中区大手町 2-11-10）

<https://www.nhk.or.jp/hiroshima/>

https://www.nhk.or.jp/hiroshima/station_info/map.html

[見学概要]

- ・NHK だからできること（PD・記者業務紹介を含む）垣内智恵（企画総務部）／西村泰典（NHK サービスセンター広島支局長）
- ・8K「インタラクティブ・原爆の絵は語る」の上映
- ・現役記者から学ぶ地方メディア実態【榎嶋愛理記者＝呉市局（2016年新聞卒）】大坪記者（神学部卒、4月入局）
- ・NHK 取材職種インターンの紹介
夕食 市内

■9月25日（水） 中国新聞社・中国放送

集合時間 09:20 集合場所 中国新聞社本社正面玄関前

中国新聞社（広島市中区土橋町 7-1）

<https://www.chugoku-np.co.jp/>

<https://bb-building.net/city/info/1657.html>

[見学概要]

編集局・ヒロシマ広島平和メディアセンター、記者らと懇談

西原太編集局次長 卒業生＝二井理江記者（1989年度外英）

制作過程の案内、吉原圭介・平和メディアセンター長から中国新聞の平和報道について講話。地元カーブ報道、警察報道、中国新聞の重点報道など。

移動

昼食 市内

移動

集合時間 13:50 集合場所 中国放送本社前

中国放送（広島市中区基町 21-3） <http://rcc.jp/>

[見学概要]

- ・情報バラエティ番組「イマなまっ！」 <http://tv.rcc.jp/imanama/> 生放送見学
- ・報道記者（これまで営業や東京支社勤務の経験もあり）の話
- ・社内見学と全体的な話

卒業生＝田口麻衣アナ（1997 年外露卒） <http://rcc.jp/an/taguchi.html>

松岡千映（1996 年度外独卒）

移動 夕食 市内

■9 月 26 日（木）

各自宿泊先チェックアウト

広島平和記念公園、原爆資料館⇒（フェリー）昼食後 宮島、厳島神社ほか
見学後、現地解散

■宿泊先：各自手配

■参加費用 2 泊 3 日旅費（交通費・宿泊費）自弁

■参加者名簿 12 名（男 4 名、女 8 名）（最終）

no.1	A1819172	林 里穂	ハヤシ リホ	2 年次
no.2	A1819482	西 瑞葵	ニシ ミズキ	2 年次
no.3	A1819587	茶畑 桃花	チャバタケ モモカ	2 年次
no.4	A1819628	根本 南美	ネモト ミナミ	2 年次
no.5	A1819912	田崎 陽子	タザキ ヨウコ	2 年次
no.6	A1719356	石川 奈南	イシカワ ナナ	3 年次
no.7	A1719732	加藤 真那	カトウ マナ	3 年次
no.8	A1619184	松島 志保	マツシマ シホ	4 年次
no.9	A1619210	岩渕 健太郎	イワブチ ケンタロウ	4 年次
no.10	A1619347	久保田 友宏	クボタ トモヒロ	4 年次
no.11	A1619634	山田 真	ヤマダマコト	4 年次
no.12	A1619853	中村 悠太郎	ナカムラ ユウタロウ	4 年次

※緊急連絡先を別途知らせること

■引率 鈴木雄雅 （090-3535-0696）syuga@ezweb.ne.jp HAF00025@nifty.ne.jp

宿泊先＝アパホテル広島駅前大橋 0570-00-6111

※コーディネーター 登地敬様（1991 年ゼミ卒、中国新聞社⇒株式会社エムネス）に全面的にご協力いただきました。そのほか、メディア各社での上智大学卒業生の方々、また今回の訪問に際しお世話になった皆様、改めてお礼申し上げます。

2019 年ゼミ合宿@広島を終えて

A1819172 林 里穂

9 月 24 日から 26 日に広島にて行われたゼミ合宿。NHK 広島放送局・中国新聞社・中国放送の 3 社を見学し、地方メディアの実態について学んできた。各社を見学し話を聞いた中で感じたことを述べていく。

はじめに、NHK では 8K 放送の映像体験をした。8K とは画素数の多い高精細な映像を鑑賞できる技術。まるでその場にいるかのような臨場感を楽しむことができる「未知の映像体験」として、2020 年の東京オリンピックの試合放送での本格的な導入を目指して開発が進んでいる。実際に鑑賞してみると、通常のテレビ映像と比べて圧倒的に質が高い。アーティストのパフォーマンス映像では、衣装やダンスの動きなど細部までをきめ細かな映像として楽しむことができた。

一方でこうした映像を日常で楽しむためには、高いコストがかかるのはもちろん、専用のアンテナやケーブルの設置など受信環境の整備が必要になり、幅広い浸透までにはそれなりの時間を要するだろう。ここまでの高機能な映像のニーズがどれほどの段階まで高まっていくのか、今後注目していきたいと感じた。

さらに、現役記者の方の話も伺った。上司も同僚もいない 1 人体制の支局での働き方には驚いた。災害で被害を受けた遺族の方に取材を続け、結果的に話を提供してくれたという体験談に関しては、ニュースというものが単なる情報を届けるためのものだけでなく、人の感情や気持ちを伝達するものでもあるということ強く実感した。そして、記者には高い文章力や知識量だけに限らず、人の気持ちに寄り添う姿勢や高いコミュニケーション力も求められていることも分かった。

次に中国新聞社について述べていく。まず、中国新聞社では 2015 年 4 月末に夕刊の発行を中止し、それ以降朝刊と一緒に配達する有料の新しい媒体「中国新聞 SELECT」を創刊した。フルカラーで海外、経済のニュースを中心に、厳選された話題、地方紙ならではの地域的話題（スポーツなど）に焦点を当てた企画も設けられている。実際に見てみると、通常の新聞と比べカラーで図や写真などがより多く取り入れられているため、馴染みやすく読みやすい印象を受けた。地方紙だからこそ掘り下げることのできる地域的話題のニーズの高さも感じ、地域密着型のメディアの実態を知ることができた。さらに、デジタル版での記事配信にも力を入れていてこまめに速報性の高いニュースを発信している。購読数や広告収入の減少、配達員や印刷コストの削減を目的に夕刊廃止に踏み込んだとされるが、中国地方の複数の都府県にまたがる「ブロック紙」でさえもそうした手段を取らなければならない厳しい現状を知り、新聞離れの深刻さとネットニュースへの需要の高まりを感じ

られた。

また、夕刊を発行しないことにより記者の労働スタイルにも変化があると分かった。夕刊がある場合には昼頃までに掲載内容を決定しなければならないため、早朝から出勤が求められるが、ここでは朝刊のみであるため実際にほとんどの記者が昼過ぎからの出勤にシフトしたという。個人的に常に編集室に記者がいるイメージが強かったため、こうした環境は印象的だった。そして、中国新聞社に「ヒロシマ平和メディアセンター」が編集局内に開設されている。被爆地のメディアとして国内外に情報を広げていくための専門的機関であり、原爆・平和報道の中心となっている。被爆者の証言や原爆資料館の収蔵資料について触れる企画など、広島に本社を持つ地方メディアならではの取り組みで、風化させないための情報収拾・発信が絶えず行われていることが分かった。

最後に、中国放送では情報番組「イマなまっ！」(毎週月・金 15:00~18:56)の生放送の現場を見学した。キューシートに記載された時間配分をもとにトークを回し、時間通りに合わせていく出演者とディレクターのやり取りの中には緊張感が溢れていた。中継での報道や映像の切り替えなど、見えないところでの指示出しも飛び交う放送の裏側を体感することができた。

その他、RCC テレビの放送開始 60 年記念として、広島カープの野球中継が早く終了して時間が余った場合にのみ編成されるドラマを「放送日未定」の状態で放送する企画が行われていた。他にはない斬新な取り組みであり、ここでも地域のつながりの強さを感じ、地域的话题に特化したものを発信し続ける地域密着型メディアの現状をみることができた。

以上 3 社の企業見学に加え、原爆ドームや平和記念資料館にも訪れた。どこに行っても感じたのは外国人観光客の多さ。広島が、世界的に平和教育に取り組める場所として捉えられていること、そして貴重な情報が多く残された場所となっていることを実感した。

最後に、全体を通して各メディアが原爆・平和報道との繋がりはもちろん、地域活性化につながるローカル的な話題に敏感であることが分かり、地方単位での密度の濃さを実感できた。今後、地域密着型のメディアとしてその他の地域でも、どのような取り組みがなされているのか見てみたい。



中国放送本社前にて集合写真



原爆ドーム



ゼミ合宿レポート

A1819482 西 瑞葵

9月24日から26日にかけて広島ゼミ合宿に参加した。今回はNHK広島放送局、中国新聞社、中国放送の見学に行き実際の現場を拝見させていただいた。上智の卒業生でメディアの第一線で活躍している方々のお話も聞く機会を頂いた。

まず初日のNHKでは8Kシアターで最新鋭の音響・画質で映像を見た。2020年の東京オリンピックに向けて、より実際にその場で競技を見ているような臨場感を伝えるためにNHKは8Kでの撮影に以前から力を入れていたという。私は8K映像を初めて体感したが、色彩がより鮮やかになっていることはもちろん水しぶきなどもよりリアルに映し出されていて臨場感という意味では今までとは一線を画していると感じた。

また新聞学科卒業生で、現在NHK呉支局榎嶋記者のお話はとても興味深かった。呉支局には現在榎嶋記者1人しかいらっしゃらないようで、自分1人で取材を行いカメラも回しているという。1人だからこそ自分の関心がある取材をできるという自由な面もあるようであった。特に印象的だったのは西日本豪雨で息子を失った方への取材に関するお話だ。最初にご遺族の方はその事に関して取材されることはもちろん話すことも拒んでいたそうだが、しかし世間話から始まってだんだんとその方と仲良くなり、信頼を勝ち取ると西日本豪雨に関して口をひらいてくれるようになったという。匿名報道に関する議論が最近では語られる中で、人々に広く情報を伝えるという点で記者の仕事を全うするために、このように誰かの話を引き出すための努力は必要であると痛感した。

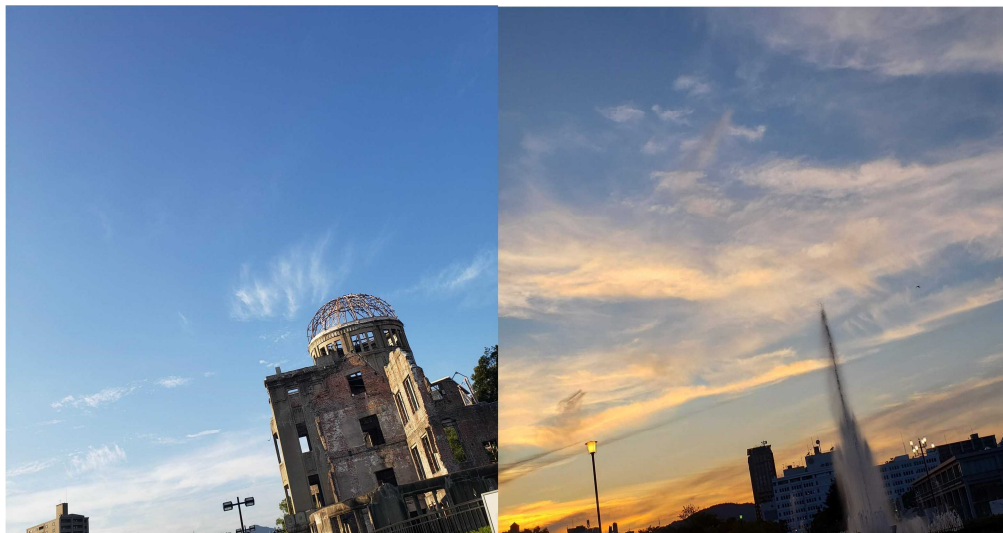


(中国新聞社にて集合写真)

2日目は中国新聞社と中国放送の見学を行った。中国新聞社では記者の現場に実際にいる方々からお話を伺った。新聞社での実際の編集の工程を実際にデスクの方に教えていただいたのは貴重な経験になった。また広島平和メディアセンターの方による中国新聞社とし

ての平和への取り組みについてお話をいただいた。被爆を受けた地からの平和に関する情報の発信に関して様々なことを語ってくださった。

2 日目の夕食会まで時間があつたので、2 年生で広島の実爆ドームと広島平和記念公園、資料館に行った。私は広島に行ったのが初めてであつたので実際に原爆ドームを見て衝撃を受けた。ドームの周りに散らばる瓦礫やレンガが丸見えになった壁、鉄骨のみになったドームの部分。とてつもなく悲惨な姿であつた。今までテレビや写真などでしか見たことがなかったが被害がここまでのものとは予想していなかった。また資料館の展示では、衣服や被爆した人々の写真の展示を見たが、どれもあまりにも現実離れしており正直この世のものとは思えなかった。実際に見て感じることは大切だと実感した。



(広島原爆ドームと平和公園)

地方メディアを体感して

A1819628 根本南美

〈合宿行程〉

2019/09/24(火)

13:50～:NHK 広島放送局 訪問

2019/09/25(水)

9:20～:中国新聞社 訪問

13:50～:中国放送 訪問

2019/09/26(木)

自由行動

9月24日、広島は数日前の台風17号を思わせることこない快晴であった。そこから3日間、天気にも恵まれた状態でゼミ合宿を過ごすことができた。

そのうちの2日間で、上記の工程表の通り NHK 広島放送局、中国新聞社、中国放送を訪れた。公共放送、新聞社、民放テレビ局といった別々の特徴を持つメディアを訪問することができ、それぞれの特色を垣間見ることができ新鮮で興味深かった。

特に中国放送にて「イマなまっ！」という生放送番組を見学したことは印象に残っている。テレビ放送画面では和やかな午後の情報番組らしい様子が映っているが、実際の現場は生放送の緊張感が漂っており気の引き締まるような空気が流れていた。事前にもらったキューシートと内容が変更されていたり時間が押していたりするなど現場は少しピリピリして



おり、生放送ならではの大変さがひしひしと伝わってくるようだった。1年の時のテレビ制作の授業にて1分間の番組を作ることすら苦労していたので、約2時間にもわたる番組を毎日つくることのすごさというのがひしひしと感じられた。

〔中国放送本社前にて〕

そして、3社を訪問して実感したことは広島のメディアがいかに「広島原爆」ということを強く意識しているかということである。NHK 広島放送局にて「8月6日に合わせて1年がまわっている」と聞いたり、中国新聞社のヒロシマ平和メディアセンターの取り組み

を知ったりなど、広島メディアというのは広島原爆の記憶というものを忘れずにきちんと発信するとあう強い想いが伝わってきた。首都圏での今年の8月6日のテレビ欄では広島についての番組が少なく、あまり触れられていなかった印象があった。そのため、やはりそこは広島メディアならではの実感し、地方メディアの意義が感じられた。

そしてこのゼミ合宿中、2日目の空き時間に実際に原爆ドームと平和祈念資料館を訪れた。個人的には3度目の訪問だったが、2019年4月25日に平和祈念資料館がリニューアルしてからは初めてであった。以前よりも展示ひとつひとつに各人の体験が織り込まれており、当時の悲惨さのリアルが伝わってきて胸が締め付けられるようであった。想像もできないほどの威力を持った爆弾が人々の頭上で炸裂し、言葉にし難い惨劇がこの地で起こったということを改めて認識し決して同じことを繰り返してはいけないと強く感じた。だからこそ広島メディアを中心として、日本全体のメディアでももっとこの記憶を忘れないように発信するべきではないだろうかと思った。

総じて3日間、地方メディアの現場の空気を感じたり平和への思いを寄せたりといったように充実した日々を過ごすことができた。この広島訪問で感じたことを忘れないようにこれからもメディアやジャーナリズムについて考えていきたい。

[平和祈念資料館と祈りの泉]



ゼミ合宿レポート

A1819912 田崎陽子

今回広島メディア局に訪問して、地方メディアの現状に触れることができた。私は地方出身者であるが上京して2年ほどが経とうとしているため、だいぶ東京のメディア報道に慣れてしまっているということを痛感した。

初日はNHKを訪問し、NHKとはどういう会社かといったことや記者の仕事について学んだ。NHKは公共放送ということもあって、各地方に支局があり、その土地に寄り添った報道や取材をしていることがわかった。特に驚いたのは、呉市局の担当者が1人だということだ。1人で取材をして映像を撮り、声を入れて1つの映像を作るというのは、自由もありつつとても大変な仕事だと思う。



NHK 広島放送局玄関にある平和祈願のモニュメント

入社3年目でも1人で局を任されるのも、NHKという会社の構成が成し得ていることであると感じた。また入社1年目は全員警察担当をするというように、育成システムをしっかりと構築しているのだという印象を受けた。しかし放送料金を顧客の同意の上で徴収していると話されていたが、家に何度も押しかけてセールスのように徴収するやり方は、強制的に払わせているのではないかという疑問もある。

次に中国新聞社に訪問し、地方における新聞報道の現状を学んだ。広島ということもあり、原爆についての報道に力を入れていることがとてもよくわかった。扱うニュースの範囲がある程度限定されている地方新聞社だからこそ、地方に密着した報道が継続してできるのだと感じた。

時代が進むにつれて実際に原爆を経験した人が少なくなってしまうため、広島メディアが報道し続けることによって、いつまでも戦争の体験が伝承されるのではないかと。地方メディアにはそういった役割が大きくなると思う。また全国的なニュースと地方に特化したニュースを、どれくらいの割合や大きさに掲載するかが重要であるとわかった。

中国新聞の購読者は地元に住んでいる人がほとんどであるため、地元のニュースの需要も大きいと思うが、世間で話題になっているニュースも取り上げなければならない。例えば、カープが試合に勝ったニュースと、相撲で横綱が優勝したニュースがある場合、どちらをスポーツ紙面の一面にするのだろうか疑問に思った。しかし、広島を訪問して地元の方のカープに対する熱い思いを感じたため、中国新聞社はカープの試合を大きく取り上げ

るのではないかと思います。また広島で行われたアマチュアのスポーツについても、大会ごとに結果を全て報道しているのがとても地方新聞らしいと感じた。私の地元の大分合同新聞も、アマチュアのスポーツもしっかり報道しており、紙面に自分の名前が載ることがとても嬉しかったことを覚えている。このように地元に着した報道をすることで、地元で愛される新聞社へとになっていくのだと考える。



中国新聞社での集合写真

最後に RCC に訪問し、地方の民間放送局のあり方について学んだ。ここでは実際に生放送を見学させてもらい、生放送の現場を肌で感じる事ができた。印象としては現場に人が少ないなというように感じた。またキューシートよりもだいぶ時間が押してしまっても、生放送内でうまく時間の帳尻合わせをしているのがすごいと思った。放送の内容はトップニュースが地元の園児が蜂に襲われたというニュースで、その後もダニの特集など、キー局のお昼のニュース番組では取り上げないようなコアなニュースを特集していたのが印象的だった。視聴者がどんな話題を求めているのかということにとても気を付けていることが伝わった。それもキー局とは違い、視聴者の層が限定できる地方メディアならではのところだと思う。



RCC 前での集合写真

今回広島を訪問して、首都圏と地方のメディアは報道の仕方や内容が大きく異なることがわかった。また会社ごとの社員数が多すぎないため、会社としての方針の把握がしやすいのではないかと感じた。人がすくないため全員が様々な部署を経験することで、全員がお互いの仕事を理解することができ、クオリティの高い報道ができるのではないかと。地方メディアにとって重要なことは、視聴者を意識して地元の方に需要のある報道をし続けることだと思った。



観光で訪れた宮島と平和記念公園

2019/10/10 記

秋の広島ゼミ合宿

A1719356 石川奈南

今回、広島でのゼミ合宿に参加して、地方のメディアがそれぞれ地域に密着し、在京メディアとの差別化を図っていること、地方メディアの必要性について考えさせられた。

ゼミ合宿は現地集合、現地解散で行われたので、各自で広島への交通手段、ホテルを手配。この中で私は人生初めての LCC を利用した。想像していたよりも座席の広さやサービス面がちゃんとしており、国内旅行には十分であると感じた。それでも、成田空港の駅に着いてから成田空港第3ターミナルはとても遠かった。また、ホテルも東京や大阪の価格帯よりも、とても安く泊まることができた。オフシーズンの平日に利用したこともあるが、都市と地方との価格帯のギャップを感じた。

○1日目 NHK 広島放送局

NHK 広島放送局では、まず、8K 放送の体験を行った。新たな技術として期待されている 8K 映像は、肌の質感、産毛、照明の色味など、通常の 2K 放送では味わえない臨場感を味わうことができた。紅白歌合戦のダイジェスト映像や原爆の日の特別番組「原爆者の絵は語る」のダイジェストなど、高画質放送の強みが表れていると感じた。特に紅白歌合戦のダイジェストは 2K 放送を見ているからこそ、その違いをより実感することができた。また、公教報道だからこそ、E テレを放送できるということが興味深かった。その他に、榎嶋記者のからリアルな記者の声を聞くことができた。地方の放送局だからこそ伝えられることがあるということが分かった。特に広島の豪雨災害時の取材についてのお話で、記者は「伝えたい人の代弁者」と話していたことが印象に残った。また、休みが多いということがとても意外だった。私の記者の印象は東海テレビの「さよならテレビ」の中で写されているものであった。働き方改革に否定的で、休んでいたら記者はできないとも感じていたので、9連休という話はとても驚きであった。

○2日目 中国新聞社

まず、中国新聞社の建物は、とても古い印象であった。新聞社と言ったらこんな感じという THE 新聞社という印象を受けた。しかし、人が少ないというのは意外だった。中国新聞社は夕刊を廃止し朝刊と SELECT という形を取っているということで、何故午前中の時間に新聞社の中に人が少ないのか理由が分かった。SELECT の内容はとても興味深かった。中国新聞社が色々と模索しているということを伺い知ることができた。

また、ヒロシマ平和メディアセンターの取り組みも興味深かった。社会貢献活動として、広島という特徴を生かして平和に向けて活動していることが広島のメディアだからこそで

きることであると考えた。

○2日目 午後 中国放送（RCC）

地方放送局と言えば地味な印象であったが、想像以上に自社制作率が高く驚いた。特に、リリースドラマはとても興味深い取り組みであると思った。また、兼営局のため社内にラジオブースがあり、掲示ポスターなどを見ても、テレビ放送とラジオ放送を両立させていることが良く分かった。また、掲示されていたカープの視聴率の高さには驚いた。

午後4時からの「イマなま」では、トップニュースで蜂の被害について取り扱っていた。このニュースは全国ニュースにも上がったが、地方のメディアだからこそ、より詳しく報道できているのだと思った。私はテレビ制作の授業でテレビ番組の制作も行っているが、実際の現場はすごかった。ピンマイクだけでやっているため、想像していたよりも省エネな印象だった。また、Qシートも、テレビ制作で作ったものより、簡単なものであった。臨機応変に対応する力が必要であると感じた。



千光寺から見た尾道の風景

○3日目 尾道

3日目は各自自由行動ということで、私たちは尾道に行った。広島駅から約1時間半。街並みがレトロで、どうして人気なのかわかった気がした。私の地元も海街であるが、本物の田舎には無いおしゃれさがあった。道路がモザイクタイルであるところに大きな違いを感じた。街並みの写真を撮ることがとても面白かった。観光地として確立されているため、グルメマップやツーリングマップなどが充実していた。

事前にインスタグラムで #尾道、#尾道カフェ、#尾道グルメなどを検索すると、多くの人がおしゃれな写真を上げていた。昼ごはんは尾道焼き（お好み焼き）と尾道ラーメン焼きそばを食べた。どちらも麺で食べた後苦しかった。



尾道プリン

また、インスタで特に気になった尾道プリンを購入。帰りは岡山から新幹線に乗車。尾道プリンは新幹線内で食べた。充実した3日間であった。

ゼミ合宿に参加して

A1719732 加藤眞那

今回、広島でのゼミ合宿に参加し、地方メディアについての実態を探ったことで、普段私たちが暮らしている東京のメディアとの差や強みを知ることができ、非常に有意義なものになったと思う。

現地集合現地解散、宿も飛行機もお任せ、というなかなか放任されたゼミ合宿であったため、宿の予約が遅く、一週間前になってもろくに決まっていなかった。初日は成田空港



から LCC で広島空港まで行ったが、想像以上に遠い LCC のターミナルに迷い、ゆっくり朝食をとっていたら、危うく乗り遅れそうになるというハプニングもあったが、無事、集合時間に到着できてよかった。また、ホテルは素泊まりが安いという理由だけで三井ガーデンホテル広島に宿泊したが、想像以上に良い設備のおかげで毎日安眠することができた。これは良い想定外だった。

1 日目：9 月 24 日

初日に訪問した NHK 広島放送局では、8K の視聴をはじめ、新たな技術を知ることがもちろん、地方支局特有のメリット・デメリットや今後の放送業界などについて広く理解することができた。特に、榎嶋さんは入社間もないにも関わらず、呉支局を一人で任せられているなど、驚くことも多く、NHK では新人ベテラン関わらず、一人一人の責任能力が強く問われているように感じた。公共放送であるということもあり、他に訪問したメディアのどこよりも施設が綺麗で、技術開発にもお金がかかっているように感じた。特に、8K 視聴した紅白歌合戦は、歌手の声がよりクリアに聞こえるように感じた。

夜は、チェーンの居酒屋だったが、寿司が美味しかったのでよかった。



2 日目：9 月 25 日

午前中に中国新聞社を見学した。夏に東京の 3 大新聞社のインターンに行っていたので、より違いを確認することができたと思う。東京に本社を置く新聞社はやはり高層ビルの全

体が会社であり、セキュリティもかなりしっかりしている印象を受けたが、今回訪問した中国新聞は、「古き良き日本企業」という感じで全体的にアットホームな印象を受けた。各部の垣根はほとんどなく、大人数でないからこそできる体制であると感じた。また、新聞発行以外に行っている事業も、大きなものから小さなものまで、その地に根ざしたものが多く、中国新聞がいかに地元の人々にとってポピュラーで愛されているかを感じ取ることができた。地方紙であるからこそ、全国ニュースと同じだけ大切にされる地方ニュースをいかに取り扱っているかという話はとても興味深かった。三大紙と比べてやはり地方面のレイアウトは広いように感じた。また、現地の高校生と新聞を作成したり、大学に訪問して魅力を伝える企画などは、都会への流入を避ける一手にもなり得ているのではないかと感じた。



午後は中国放送を訪問した。生放送番組「イマなまっ！」の見学には驚く点が多くあった。まず、スタジオが想像より小さかった。コーナーが変わるごとにモニターや出演者の位置などを細かく変え、CM放送中の短い時間にたくさんの絵面を作り出していることを初めて知った。また、放送にかかわるディレクターやカメラマン、プロデューサーも最低限の人数で行っており、私が想像している生放送のテレビ番組に必要な人数の半分ほどだった。



社内見学でも、小さな社内の中にラジオ局、テレビ局、事業局がしっかりと入っており、地方局としてしっかりと機能しているように思った。また、カープの野球中継が広島メディアにとっていかに大切であるかが視聴率の話を通して分かった。カープ中継が終わって時間が余った時にだけ放送するドラマの企画はすごく面白いと思った。

また、夕食前に原爆ドームと平和記念公園の自主見学をした。

3日目：9月26日

自由行動の最終日は尾道観光をした。千光寺に行き、お好み焼きを食べ、ケーキを食べ、プリンを食べ、楽しい観光となった。



ゼミ合宿の成果

A1619347 久保田友宏

4 年にして初めてのゼミ合宿参加となったが、個人的には西日本には縁が薄かったので、いい経験になった。広島県（呉市）は母親が小学生時代に住んでいた場所であり、感慨深かった。

広島県に降りた瞬間、広島カープの支配力の強さを感じた。カープが試合に負けた翌日は広島の治療が悪化するのとは本当かもしれないほどであった。

NHK の 8K 放送設備や生放送の現場の見学など、これまで座学で触れてきた情報を肌で感じ、当事者目線で見学することができた。一方で、どの放送局、新聞社も対応がさながら就職活動中の会社説明会のように、もう少しジャーナリズム的な立場としての現場の声も聞いてみたかった。

合宿期間中で最も心に残っているのが、大和ミュージアム（呉市）に展示されていた零戦（零式艦上戦闘機）と、特攻隊員が出撃直前に家族に当てて遺した肉声のメッセージだった。弱冠 21 歳の青年とは思えぬ逞しさと、切なさに思わず涙が溢れそうだった。

太平洋戦争のバックグラウンドとしての呉、平和の象徴としての原爆ドーム、そして報道機関としての新聞テレビ各局、これらを同じ土地で一度に訪れることができたのは、この合宿の一番の成果であったと思う。それぞれを別々のタイミングで訪れていたなら、この連続性を半分しか感じられなかったかもしれない。



「イマなま！」生放送スタジオ RCC テレビ

零戦 大和ミュージアム

合宿で感じた地方メディアの役割

A1619853 中村悠太郎

これまで、地方メディアの役割・必要性を感じることがなかった。しかし合宿に参加し、地方メディアの3つの役割を認識することになった。その3つの役割を、実際にメディアを見学した経験から確認したい。

1. 災害時における迅速な対応

まずは、災害時における迅速な対応について考えたい。広島豪雨の際、一番現場に近い記者が取材にあたり、実際に報道まで行っていたことに驚いた。なぜなら、普段記者はオフィスで仕事をしていて、事故・事件が起きたら現場まで向かうと思っていたからだ。NHKの地方記者は普段から小さな部屋で仕事をし、時には1人で事件や事故取材しているというエピソードは印象に残った。

NHKは放送法で日本全国に遍く報道をする「ユニバーサルサービス」の役割を担うことが義務付けられているが、事件・事故の迅速な報道を行うこともジャーナリズムの役割として大切であると認識することができた。

2. 地域の事件を届けること

RCCへ番組見学に訪れた際、子供がハチに刺されたというニュースを報道していた。子供がハチに刺されたというニュースは、全国ニュースで届けられることがほとんどない。しかし、その地域に住む人たちにとっては命に関わることであり、重大なニュースである。印象に残る大きな全国ニュースだけを扱うのではなく、その場所で必要なニュースを扱うことが地方メディアの役割であることを認識した。

3. 地域を代表するメディアとして世界へ発信する広報

世界にトクテーマを与えることも地域を代表するメディアの役割であると認識した。中国新聞社に訪れた際、広島平和メディアセンターを中国新聞が運営し、原爆の凄惨さを伝える役割を果たしていると理解した。特に印象に残ったのは、海外言語に対応しているということだ。日本人は教科書などで広島原爆について学ぶ機会はあるが、海外の人にとってその機会はない。世界でも核問題は共通の問題であるため、原爆を落とされた地域のメディアが核について発信していくことは、世界の核への認識を深める上で大切なことであると感じる。

以上のことから、地域を代表するメディアとして世界へ発信する広報としての役割も、地方メディアの役割であると感じた。

実際に地域メディアを見学した経験をもとに、地域メディアの役割を確認した。その役割は大きいものに関わらず、地方メディアの財源はよくない状況にある。そのため、地域メディアはどうマネタイズを行っていくのかが今後の課題であるように思う。

雑感・ゼミ合宿 2019 夏

A1619634 山田 真

在京の人々が広島についての報道を見聞きするとき、その多くは8月6日の平和記念式典かプロ野球チームの活躍に二分される。換言するならば、広島のイメージは世界で始めて原子爆弾が投下された都市、もしくは熱狂的な野球ファンが多い都市という2つに集約されるであろう。

広島という都道府県の特徴について触れるとき、原爆と野球の話題は欠かすことのできない内容である。太平洋戦争末期に米軍が投下した原子爆弾によって、広島市は焦土と化した。呉軍港を抱えるなど、それまで中国地方の経済の中心として機能していた広島は一発の爆弾によって一日にして荒廃したのである。市街地に残る原爆ドームはその威力を今に伝えており、世界文化遺産に指定されているのも頷ける。そのような戦後の状況下において、広島東洋カープは1950年に誕生した特定の企業をバックにしない市民球団として誕生した。カープは広島の戦後復興のシンボルでもあり、人々の希望でもあったのである。西日本に居を構えたことがない私も他聞に漏れず、広島についての事前知識はその程度のものしか持ち合わせていなかった。その先入観は、合宿を通じて360度変化することになったのである。

初日はNHK広島に行った。講演では、NHK全体の概略の後に、8月6日に政府が主催する平和記念式典及び2018年に中国地方で発生した豪雨災害の報道拠点としての重責について、実際に現場で携わっていた人々から職務を伺うことができた。核兵器廃絶を願う広島の市民の思いを多少なりとも理解することができた一方で、日本という国が米国の核の傘に守られているという矛盾を大いに実感させられた。災害報道に関しては、合宿以前に就職活動で宮城県内のメディアを訪問した際に、東日本大震災を巡る各種報道とその後について触れていたのも特段目新しい発見はなかった。

2日目の中国新聞社と中国放送社は、狂気にも似たカープ愛をただただ感じる企業訪問であった。地元の球団を応援する姿勢や愛着については、東北楽天ゴールデンイーグルスを本拠地に持つ宮城のメディアで知っていたつもりであった。しかし、「どんなに些細なことでもカープの記事はスポーツ面必ず毎日掲載する」「優勝したらその日の夜のラジオ定期プログラムは全て廃止して、朝まで緊急生放送をする」など、2社の人事担当者から述べられる話はそれまでの常識を覆す内容ばかりで、ある種の宗教性すら感じる企業訪問であった。

就職活動の一環でインターンシップや会社説明会に出向いている身としては、今回のゼミ合宿は復習をしているような印象を受け些か冗漫な部分も感じていた。しかし、地方メディアが在京メディアの受け売りに終始している金太郎飴のような存在ではなく、その地域に根ざした報道姿勢を堅持していることを訪問3社から改めて実感することができた。